

Lewis Carroll ; Through the Looking-Glass

——夢と現実の間で——

田 口 徳 子

I

Lewis Carroll (1832-1893)は、England 西岸、Cheshire 地方の Daresbury 村に、11 人兄弟の 3 番目、長男として生まれた。本名は Charles Lutwidge Dodgson である。彼の生きていた時期は、19 世紀後半、ちょうど Queen Victoria が在位していた時代である。G.M.Trevelyan の言葉借りるならば、当時の英国は「育ち盛りの子供」であり、世界の最先進国であった。産業の発達によって巨大な富の集積を可能なものとし、議会制内閣はより一層の充実をみていた。文化的観点から見ても、Darwin の *The Origin of Species* が政治的に重要な位置にあったというほど、彼ら Victorians は、新しいものを次々に追い求めていた。だが、この政治経済的動向とは全く対照的に、日常生活においては頑ななまでに保守的であった。表面上の質素・勤勉さや偽善が重んじられ、また美德と見なされ、各個人の精神や心の深淵さなどは全く無視されていた。その抑圧故に、地下集会などで秘かにポルノ小説が読まれ、公然の秘密となるまではもてはやされたのも、この時代の特色である。Lewis Carroll の父、Charles Dodgson は、その表面的美德主義の頂点とも言える聖職者——牧師——であり、一家においての存在は絶対的なものであった。Charles 少年は、社会とそして家庭と、道徳主義というものに、二重に縛られて成長したのである。その精神的圧迫のために、彼がひどいどもりであり、他の姉妹弟にも全員に何らかの言語障害があった、ということは周知の事実である。そのような環境下で、Charles 少年は牧師館という小さな世界においてはスター的存在であった。女の子ばかりの中で、長

男の彼は姉妹たちのために家族新聞を編集し、ゲームや遊びを次々と作り出すなどして一身に尊敬を受けていた。後の天才作家はすでにその頭角をあらわしていたのだ。

しかし間もなく彼は、勉強のために寄宿制の男子学校の行かされる。女の子の中で育ち、井の中の蛙のようなうぬぼれを抱いていた彼は、いきなり知らない世界にほうり出されたのである。色白の、どもりで社交性のない、勉強だけは群を抜いてできる少年が、育ち盛りの腕白坊主の反感を買い、からかわれ、いじめられるということは当然のことであった。この時期に彼は生涯を貫く *philosophy*——少年嫌い——を確立したのであった。閉ざされた彼の心はますます少女に傾倒し、現実からの逃避を試みるようになっていった。成績優秀であった彼は、Oxford 大学へ進み、そこでも優秀であったため、数学の講師として研究室をかまえることとなった。若干 22 歳であった。

1856 年、彼は作家 Lewis Carroll を世に送り出す原動力となった一人の女性に出会った。Alice Pleasance Liddell——当時 4 歳だった彼女は、Dodgson より少し遅れて Christ Church の学寮長に就任した、Henry George Liddell 博士の 2 番目の娘であった。後の 2 つの作品、*Alice's Adventures in Wonderland*, *Through the Looking-Glass* のモデルとなったのもこの少女である。日を追うごとに親しさを増していった彼らは、ついに「英文学史上最も重要な年」と呼ばれる 1862 年を迎えるのであった。この年の夏、Dodgson は Alice と彼女の 2 人の姉妹とともに、Isis 川へ舟遊びに出かけた。この時に彼が語って聞かせた話が『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*) の原型『地底の国のアリス』(*Alice's Adventures Under Ground*) となったのである。この記念すべき Golden Afternoon を、彼は「不思議の国のアリス」の序詞で次のように表現している。

All in the golden afternoon
Full leisurely we glide!

For both our oars, with little skill,
By little arms are plied,
While little hands make vain pretence
Our wanderings to guide.

Ah, cruel Three! In such an hour,
Beneath such dreamy weather,
To beg a tale of breath too weak
To stir the tinest feather!
Yet what can one poor voice avail
Aguinst three tongues together ?¹⁾

作者の Dodgson のみならず、彼に物語を語らせた Alice Liddell 自身も、その当手を回想している。「ドジスンさんは、物語がおもしろいところにさしかかると、いつもきまって居眠りのふりをするのです。そこで私達は、大あわてでドジスンさんを起こしたのです。」姉妹たちはかれに、いつか聞かせてくれたおもしろいお話を本にしてくれるように頼んだ。この時すでに Lewis Carroll というペン・ネームを持っていた彼は、さし絵ともども自筆で、『地底の国のアリス』を著し、Alice Liddell に呈した。『アリス』の半分の長さであった。

それほど仲むつまじかった Alice と Dodgson は、『不思議の国のアリス』の発行以前に別れねばならなかった。Liddell 姉妹をめぐって、Dodgson と Liddell 夫妻の仲が悪化しはじめたからである。典型的な Victorian Lady である Alice の母親は、娘をしばしば外に連れ出し、奇妙な写真をとったり、膨大な数の手紙を書いてよこした Dodgson——^{みそじ}三十歳過ぎて独身のどもりの男——を変質者と見なし、Alice から遠ざけた。

その後、1872 年には『鏡の国のアリス』が、1876 年『スナーク狩り』、1888 年、1893 年に『シルヴィーとブルーノ』の前・後篇がそれぞれ出版された。あの‘Golden Afternoon’以来、啓示でも受けたかのように、1898

年1月、65歳でこの世を去るまで、Lewis Carroll は次々に作品を世におくり出していった。

II

「鏡の中のアリス」(*Through The Looking-Glass, and what Alice Found There*)は、『不思議の国のアリス』の続篇として、6年後の1871年に出版された。ストーリーは、前作同様、Aliceの夢の世界の出来事を追って展開する。「鏡」=Looking-Glassが夢の入り口であり、前作の縦の広がり、奥への広がりによって変わっているし、チェスのルールが前作のトランプとは比べものにならないほど意図的に、緻密な計算のもとに使われており、主人公のAliceは、自分でも気づかぬうちに、チェスの駒となり、ゲームに参加している。『不思議の国』におけるストーリー展開は、読者はもちろん、作者のCarrollでさえ一寸先は何か起こるか見当がつかぬ、故におもしろい、という意表をついたものであった。しかしこの作品においては、展開方法のみならず登場するcharactersも、それらのセリフも行動も、完璧な計算に基いたものである。それ故大部分の研究家、評論家たちは、「Carroll本来のノンセンス文学の精彩は薄れている」と言い、「自意識の作品」との評価もある。しかし、前作の成功の見返りに訪れた困難が彼を技巧に走らせたとしても、そこには「不思議の国」では出会えなかったAliceが、Carrollが居るのである。

「鏡」を題材とした文学は、古今東西様々なものがある。それほど多くの人々が鏡の持つ魔性のとりことなってきたのである。その前に立つ者の姿を、寸分違わず真実そのままに映し出す、鏡。人間が鏡に魅きつけられるのは、その中に映った自分の姿を見て、改めて自己の認識すること——self-identificationの獲得——が理由ではなかろうか。古代ギリシャのnarcissusに始まり、飽くことなく己れの姿を映しつづけてきた人間は、いつしか鏡の中に、もう1人の自分、別の世界を求めるようになったのだ。現実からの逃避を日夜試みていたCarrollが、この「別世界への入り口」を見のがすはずがない。当時Alice Liddellとは別れざるを得

ない状況にあった Carroll は、もう 1 人の Alice によって鏡の国への誘われてゆく。

But perhaps the most important single inspiration for *Through the Looking-Glass* came from a meeting with a little cousin named Alice Raikes which probably took place during August, 1868, while Dodgson was staying at his uncle Skeffington Lutwidge's house in Onslow Square, London. Alice Raikes met him walking in the common garden at the back of the Onslow Square houses. After Dodgson had heard that her name was Alice, he said that he was very fond of Alices and invited her into his uncle's house.

The room they entered had a tall mirror standing in the corner. Dodgson gave his cousin an orange and asked her which hand she held it in. When she replied 'The right' he asked her to stand before the glass and tell him in which hand the little girl in the mirror was holding it. 'The left hand', came the puzzled reply. 'Exactly', said Dodgson, 'and how do you explain that?' Alice Raikes did her best: 'If I was on the other side of the glass,' she said, 'wouldn't the orange still be in my right hand?' Years later she remembered his laugh. 'Well done, little Alice,' he said 'The best answer I've had yet.'²⁾

この別世界、鏡の国において、Carroll は現実というものをまっさかさまにしている。こちら側の常識など全く通用しない「あべこべの国」である。現実世界において、いわゆる世間の常識、道徳に縛られ、言葉の障害に悩んだ Carroll が、彼お得意の造語——鞆語——を駆使し、痛烈な皮肉をもってそれらに復讐しているかのようなのである。

この「鏡の国」で、主人公 Alice はある時は子供のように無那気に、ある時は成熟した女性のようにしたたかに、行く先々でその困難を乗り越

えてゆく。そして彼女こそ、Victorian Age の代表選手、センス（分別）の化身なのだ。とはいえ、この国ではセンスは通用しない。前作、「不思議の国のアリス」の中で絶えず繰り返された言葉、“Who am I?”は、この作品においても同様である。自己確認であるはずの鏡の中で、Alice はしばしば自分を見失うのどある。

‘What do you call yourself?’ the Fawn said at last. Such a soft sweet voice it had!

‘I wish I know!’ thought poor Alice. She answered, rather sadly, ‘Nothing, just now.’

‘Think again,’ it said: ‘that won’t do.’

Alice thought, but nothing came of it. ‘Please, would you tell me what you call yourself?’ she said timidly. ‘I think that might help a little.’

‘I’ll tell you, if you’ll come a little further on,’ the Fawn said. ‘I can’t remember here.’

So they walked on together through the wood, Alice with her arms clasped lovingly round the soft neck of the Fawn, till they came out into another open field, and here the Fawn gave a sudden bound into the air, and shook itself free from Alice’s arms. ‘I’m a Fawn!’ it cried out in a voice of delight, ‘and, dear me! you’re a human child!’ A sudden look of alarm came into its beautiful brown eyes, and in another moment it had darted away at full speed.¹³⁾

森の中でいっしょに名前を失った Alice と仔鹿は、お互いに自分を取り戻せないまま、奇妙な愛情で結ばれる。本来なら人間を恐れるはずの仔鹿は、この「名前のない森」における Alice の唯一の友だちである。誰もが皆名前を失くし、平等である森、お互いの identity など問題になら

ない。この情景はまさに「死」を意味するものであると私は信じる。と同時に、森から一歩出たとたんに関前に名前を思い出し、Alice の元から逃げてゆく仔鹿と、彼に対する愛情は少しも変わらないというのに、1人とり残されてしまう Alice の姿に、あの Alice Liddell と Carroll の姿を重ねざるを得ないのだ。この愛らしい仔鹿は、あれほど仲の良かった「ドジスンサン」の元を離れていった、少女から女へと成長していった Alice Liddell ではなからうか。そしてとり残された Alice とは、言うまでもなく Carroll なのだ。森を通り抜けるという「時間の経過」が、Alice たちを引き離した、少女が自分の性に気づいた時、別れざるを得なかったのだ。そして、そのときを永遠に止めるには、その手段は「死」以外にはありえないのだ。私はここで、Carroll の死へのひそやかな、かつ哀れなほどに切実なあこがれを感じとったのである。

ともあれ、Carroll はこの鏡の国において、現実からの逃避を試みたのであるが、はたしてそれは百パーセント成功したと言いきれるだろうか。残念ながら、彼はこの別天地においてさえ、現実の影をひきずっているのである。ありのままを映し出すのが鏡の役目であるならば、現実世界においての悲哀は、すなわち鏡の国においても“Ditto!”（ご同様）なのであり、ここに white knight（白の騎士）登場の所以がある。女王になる Alice を、「森のはずれまで無事にお見送りいたす」べく現われた白の騎士なのであるが、Alice にとってはあまり頼りにならない knight であった。

Whenever the horse stopped (which it did very often) , he fell off in front ; and whenever it went on again (which it generally did rather suddenly), he fell off behind. Otherwise he kept on pretty well, except that he had a habit of now and then falling off sideways ; and as he generally did this on the side on which Alice was walking, she soon found that it was the best plan not to walk quite close to the horse.

‘I’m afraid you’ve not had much practice in riding,’ she ventured to say, as she was helping him up from his fifth tumble.

The Knight looked very much surprised, and a little offended at the remark. ‘What makes you say that?’ he asked, as he scrambled back into the saddle, keeping hold of Alice’s hair with one hand, to save himself from falling over on the other side.

‘Bcause people don’t fall off quite so often, when they’ve had much practice.’

‘I’ve had plenty of practice,’ the knight said very gravely: ‘plenty of practice!’⁴⁾

自ら発明するところのガラクタをたくさん積みこんで登場し、絶えまなく落馬をくり返すこの騎士は、旅行に出る時でさえ、行く先々で出会うであろう少女たちのために、自作のおもちゃやゲームをトランクいっぱい詰めていた Carroll, Victorian Age という流れの速い川に合流しようとして、ついにできなかった Carroll の姿そのものである。そして最も彼らしいのは、たとえ落馬しようとも Alice に馬鹿にされようとも、彼女に対して変わらぬ忠誠を誓い、彼女を守ろうとしている点なのである。

この心やさしい騎士、鏡の国の小僧らしい住人たちの中で唯一人 Alice を守ってくれた彼に対して、Alice のとった態度はすこぶる残酷なものであった。あまりに乗馬がへたくそで、いささか足手まといになってきた騎士に耐えかね、Alice はこう叫ぶ。

‘It’s too ridiculous!’ cried Alice, losing all her patience this time. ‘You ought to have a wooden horse on wheels, that you ought!’

‘Dose that kind go smoothly?’ the knight asked in a tone of great interest, clasping his arms round the horse’s neck as he spoke, just in time to save himself from tumbling off again.

‘Much more smoothly than live horse,’ Alice said with a little scream of laughter, in spite of all she could do to prevent it.

‘I’ll get one,’ the knight said thoughtfully to himself. ‘One or two—several.’¹⁵⁾

かん高い笑い声とともに、Alice は白の騎士の努力——必死になって時流に乗ろうとする、Carroll——を、「木馬に乗ればよい」と言いつつ、完全に打ち消している。彼女の言葉を信じ、「それは調子よく動くのか」とまじめに質問する騎士、それを茶化すように笑う Alice。このような思いやりのない言葉、あざけりともとれるような笑いを、愛する Alice の口から、自らの分身——白の騎士に対して言わせている、ということは、Carroll は実生活においても、少女たちの中にひそむ恐しさ、ヒステリックに笑う女おんなの要素を察知していたにちがいない、まさに鏡は表面にあらわれないものまで映し出したのだ。自分を愛してくれる人の思いやりもわからぬほど、女とは鈍感で愚かな生き物である、とでも彼は言いたいのではないか。だが、その愚かさ故に彼は少女たちを愛しく思い、その残酷さ以上に、彼女らの純粹無垢な、鋭い感受性に魅せられていたはずである。その証拠に、あのようなひどい言葉を自分の分身にあげせた Alice の、少女としての純粹な感性の中に残った白の騎士——Carroll——の姿を、次のように美しく描写している。

Of all the strange things that Alice saw in her journey Through The Looking-glass, this was the one that she always remembered most clearly. Years afterwards she could bring the whole scene back again, as if it had been only yesterday—the mild blue eyes and kindly smile of the Knight—the setting sun gleaming through his hair, and shining on his armour in a blaze of light that quite dazzled her—the horse quietly moving about, with the reins hanging loose on his neck, oropping the grass at her feet—and the black shadows

of the forest behind—all this she took in like a picture, as with one hand shading her eyes, she leant against a tree, watching the strange pair, and listening, in a half dream, to the melancholy music of the song.⁶⁾

語られた詩^{うた}に違いこそあれ、この情景こそ、あの ‘Golden Afternoon’ のものであろう。それほど美しく、鮮やかに、あの日のことは Carroll と Alice の脳裏に焼についていたのである。だが所詮 2 人は別れねばならない。Alice は先へ進むために、そして騎士は来た方向へ帰るために。別れに臨んで騎士は、「しばらく待って、拙者がこの曲がり角まで行ったら、ハンカチを振ってくれ、そうすれば拙者は元気づけられる」と、Alice に頼んでいる。先へ進む Alice、大人になってゆく少女へ、騎士、すなわち Carroll は、自分の姿が見えなくなるまで、つまり消滅——死——するまで覚えておいてほしい、そして自分を見送らせることによって、ほんの一時でも彼女の「時間」を止めておきたい、という願いこめて頼んだのだ。しかし Alice は、未来への希望に燃えているこの少女は、半ば義理で騎士を見送ると、すぐに小山を駆け降り、小川を飛び越えて行ってしまう。もはや少女の時を止めることはできないのだ、彼女は成長してゆき、過去をふり返る必要などはないのである。

III

「鏡の国」での Alice の体験はすべてが夢であり、彼女が目覚めたことによって消滅する。しかし夢を見ていたのは Alice 1 人ではなかった。もう 1 人、赤の王様も夢を見ていた、Alice の夢を。では、もしも彼が目覚めましたならば、Alice はいったいどこにいるのか。多くの人々がこの作品に薄気味悪さを感じるのは、この挿話によるものであろう。現実を、成長してゆくことを楽しんでいる愛する Alice に、作者 Carroll は「赤の王様が目を覚ませば、お前は消えてしまうのだ」という恐ろしい言葉を、実にきっぱりと同じく「夢の中の人」である Tweedldum たちに言わせて

いる。

‘He’s dreaming now,’ said Tweedledee: ‘and what do you think he’s dreaming about?’

Alice said, ‘Nobody can guess that.’

‘Why, about you!’ Tweedledee exclaimed, clapping his hands triumphantly. ‘And if he left off dreaming about you, where do you suppose you’d be?’

‘Where I am now, of course,’ said Alice.

‘Not you!’ Tweedledee retorted contemptuously. ‘You’d be nowhere. why, you’re only a sort of thing in his dream!’

‘If that there King was to wake,’ added Tweedledum, ‘you’d go out—bang!—just like a candle!’

‘I shouldn’t!’ Alice exclaimed indignantly. ‘Besides, if I’m only a sort of thing in his dream, what are you, I should like to know?’

‘Ditto,’ cried Tweedledum.

‘Ditto, ditto!’ cried Tweedledee.

He shouted this so loud that Alice couldn’t help saying, ‘Hush! You’ll be waking him, I’m afraid, if you make so much noise.’

‘Well, it’s no use your talking about waking him,’ said Tweedledum, ‘when you’re only one of the things in his dream. You know very well you’re not real.’

‘I am real!’ said Alice, and began to cry.

‘You won’t make yourself a bit realler by crying,’ Tweedledee remarked: ‘there’s nothing to cry about.’⁷⁾

自分の存在が誰かの夢の一部分にすぎないとしたら、その誰かが目覚めた時、自分はいったいどこに居るのか。自己の存在に対する真正面からの否定、疑問の投げかけがここにある。鏡の中に逃げこんだ Carroll

は、今度は自分そのものを消そうとしているのではないか。存在するとは、生きるとは、それほど重要なことであろうか。おそらく Carroll は「生」には執着しなかったはずだ。彼が望んだのは、ただ「Alice の時を止める」ということである。もし赤の王様が Alice より先に目覚めたら、その場で彼女は消えてしまう。しかし彼女が先だったらどうなるか。赤の王様をはじめ、鏡の国の住人たち——彼ら 1 人 1 人が Carroll の分身である——は、ろうそくの炎のように消えてしまう。つまり、Carroll と Alice は 2 つに 1 つの選択をせまられたのである。どちらが「消える」のか、そうせねばならないのか。結果として彼は、現実とともに成長していく Alice を「消す」ことはできなかった、代わりに自らの分身たちを消したのだ、Alice の見た夢——幼児期の記憶——が、いつまでも彼女の中に残ることを願って。

そして Alice にとっては、自己喪失、すなわち死は、現実性とともに、鏡の国で次々と翻弄されてきた末に、進退極まった、ギリギリの線でむかえねばならぬものであった。

つまり、自分の信奉する現実を、あるいは自分自身の現実性を、否定しつくそうとする相手を、逆にこちらが否定し去ることである。自分が消滅させるか（死ぬ）か、それとも相手を消滅させるか——アリスが最後に選んだのは後者であった。⁸⁾

'I can't stand this any longer !' she cried as she jumped up and seized the table-cloth with both hands : one good pull, and plates, dishes, guests, and candles came crashing down together in a neap on the floor.

'And as for you,' she went on turning fiercely upon the Red Queen, whom she considered as the cause of all mischief—but the Queen was no longer at her side—she had suddenly dwindled down to the size of a little doll, and was now on the table, merrily running round

and round after her own shawl, which was trailing behind her.

At any other time, Alice would have felt surprised at this, but she was far too much excited to be surprised at anything now. 'As for you,' she repeated, catching hold of the little creature in the very act of jumping over a bottle which had just lighted upon the table, 'I'll shake you into a kitten, that I will !'⁹⁾

最後の目覚めに至るまでに、Alice は実に色々な目に会ってきた。それは、彼女の持っている現実性のある分別——センス——が、この鏡の国においては全く通用しないということから生じたものであり、いわばセンスとノンセンスのぶつかり合いであった。ノンセンスとは、現実、つまりセンスの世界には存在しえないものである。表裏一体でありながら、同次元では共存できない。両方の世界に共通ということはありえないのだ。ノンセンスの世界に自分の居場所を見つけた Carroll, その世界でだけ、自由に翼を広げ、のびのびとできた彼は今、愛する Alice のために、彼女の住むセンスのために、自らを消滅させたのだ。そして Alice は、唯 1 人自分を守ってくれた白の騎士でさえ、容赦なく吹き消してしまった。まさに彼女は *La belle dans sans merci* (情なき美女) であったのだ。

これほどの勝利——きわどいものではあったが——を収めながらも、目覚めた Alice は自分が吹き消した者^{なきけ}の情も見せずに、まだ問いを繰り返す。「夢を見たのはいったい誰だったのかしら？」そしてこの問いは、作者によって我々読者へと投げかけられている。

'Now, Kitty, let's consider who it was that dreamed it all. This is a serious question, my dear, and you should not go on licking your paw like that—as if Dinah hadn't washed you this morning! You see, Kitty, it must have been either me or the Red King. He was part of my dream of course—but then I was part of his dream, too! Was it the Red King, Kitty? You were his wife, my dear, so you

ought to know—Oh, Kitty do help to settle it! I'm sure your paw can wait!' But the provoking kitten only began on the other paw, and pretended it hadn't heard the question.

Which do you think it was?¹⁰

最後の問いかけに対して、センスの持ち主であれば、すかさず「アリス」と答えるであろう。だが本当に彼女 1 人だけであったのか。赤の王様たちも、やはり夢を見ていたのだと私は思う。そして、そうさせたのは他ならぬ Alice である。彼らノンセンスの生き物たちは、夢を見る中で、自分の居場所を見つけ、それを充分楽しんだにちがいない（いずれは消える運命だと知りながら、あの双子の兄弟はなんと明るかったことか!）そしてそれは、まるで「夢のように」はかないものであった。

自分というものが、他人の夢の中の一部にすぎない、という問いに対して、では、その人が夢から覚めた時、もう 1 つの生き方が自分の前に待っているのではないか、と私は答えたい。そのもう 1 つの人生が、どんなものであるかはわからない。しかし、目覚めの時は、確実に「死」によってもたらされるのである。作品中においても、Carroll は「死」へのあこがれを何度も描いているではないか。そして、おそらく彼は、死によってではなく、Alice との出会いによって目覚めかけた人であろう。目覚めかけたのである。いかに Carroll といえども、今見ている夢から目覚めることはできなかったのである。Alice の結末において彼は、現実——今見ている夢——を、ノンセンス——目覚めたあとの世界——に負けさせることはできなかった。ぎりぎりの線で後に引いたのであり、彼の死へのあこがれをそこでくいとめたのは、Alice 以外の何者でもない。Carroll の Alice への愛、また彼女の存在とはそれほど大きなものであったのだ。同時に彼を死へとかりたてたのも Alice である。それほど早く、少女は成長し、女になってゆくのである。

1898 年に彼はこの世を去った。晩年に至っても、あい変わらず大勢の少女たちが彼の周辺にいた。ある日彼は、苦笑しながらこんなことを言っ

ている。「最近は、歳をとったせいかな、少女と2人きりでいても、とやかく言われなくなった。」時の流れにさからいつづけ、たとえ少女たちが女になっても、自らは生涯少年として生きた Carroll が、時間、月日の流れに対する自らの敗北を認めざるを得なかった言葉だと、私は信じる。だが彼はあの時代、1800 年代後半、何もかもが見せかけだけの美しさに輝いていた時、少女たちによって夢を見たのである。精神の奥深くにまで浸みとおる、すばらしい夢を。

A boat beneath a sunny sky,
Lingering onward dreamily
In an evening of July—

Children three that nestle near,
Eager eye and willing ear,
Pleased a simple tale to hear—

Long has faded that sunny sky :
Echoes fade and memories die.
Autumn frosts have slain July.

Still she haunts me, phantomwise,
Alice moving under skies
Never seen by waking eyes.

Children yet, the tale to hear,
Eager eye and willing ear,
Lovingly shall nestle near,

In a Wonderland they lie,

Dreaming as the days go by,
Dreaming as the summers die :

Ever drifting down the stream—
Lingering in the golden gleam—
Life, what is it but a dream ?¹¹⁾

NOTES

- 1) Lewis Carroll: *Alice's Adventure in Wonderland* (Penguin Books) p.21.
- 2) Derek Hudson; *Lewis Carroll, An illustrated biography* (Constable London, 19) p.152.
- 3) Lewis Carroll; *Through the Looking-Glass* (Penguin Books) pp.230—232
- 4) *Ibid.*, p.306.
- 5) *Ibid.*, p.307.
- 6) *Ibid.*, pp.244—245.
- 8) 高橋康也:『ノンセンス大全』(晶文社, 1976) p.269.
- 9) *Through the Looking-Glass* pp.338—339.
- 10) *Ibid.*, p.346.
- 11) *Ibid.*, p.347.